



公益社団法人 岐阜県交響楽団

〒501-3133 岐阜市芥見南山3丁目7の10
TEL<058>244-0150 FAX 244-0151
ホームページ http://www.ktroad.ne.jp/~gikyoo/

「岐阜県交響楽団理事を承つて」

公益社団法人岐阜県交響楽団
理事 河合 進一



力だけです。

現在、岐阜県交響楽団の理事を
させて頂いておりますが、大変恐
縮しております。私の実父はもう
40年前に亡くなりましたが、職業
軍人ではありませんが陸士を出て
中尉で終戦を迎え大陸から復員し
た時、2番目の私の兄が出征中に
亡くなっていたので、私がピンチ
ヒッターで団塊の世代として生を
受けたようです。ですから、姉たち
は音楽をやっていました、男が音
楽をやるなど必要ない(と)って本
人は謡曲はやっておりましたが)

といった教育感で育ちましたか
ら、中学へ入ったら直ぐ柔道部へ、
社会人になったら剣道を始め共に
3段までやりました。ですから楽
器といったら小学校でのハーモニ

カだけです。とはいうものの、中学生頃から
人並にレコードやラジオは聴いて
おりました。社会人になっても人
から誘われてコンサートに行くこ
とはあつても、自分から行くとい
うことはありませんでした。それが
岐阜県交響楽団理事をさせて頂
くことにより、他の人々をコンサ
ートへ誘う立場になった訳です、
私の人生に於ける大変化と言え
ると思います。

さて、ここで少し自己紹介をさ
せて頂きます。私は大垣市北部の
赤坂町にある金生山という石灰鉱
山(2億5千万年前の地層)から
石灰石(化石)を採掘、焼成(千
千二百℃)、加工して、製鉄・化学
・建材・土木用・肥料・環境浄化・そ
の他、生活用品など産業・生活の基
礎素材(生石灰・消石灰)及びパソ
コンや携帯電話・スマホなどに入
っている樹脂基板などに使われるナ
ノ無機材料などを製造している会
社の社長をしております。

もう一つ、これは音楽とは大変関
係のある新型(平面)スピーカーの
開発製造を行うベンチャー企業を
16年前から手掛けております。
社名をFPS(フラット・パネル・
スピーカー)といいます。これは百
年ほど続いてきたコーンスピー
カーの世界に対して全く新しい概
念(技術)を持ち込んだものです。
コーンスピーカーの音は球面波
であるのに対し、FPSは平面波
といつて直進性の音波であり、音の
減衰率が低く、遠くまでクリア
に届きます。又もう一つの特徴とし
てほとんどハウリングをしない事
です。現在のところ世界でオンリー
ワン技術で、昨年には経済産業
省から「もの造り大賞特別賞」を
頂きました。又音質も改良を重ね
オーディオ対応のレベルまで発展
させてきております。

係のある新型(平面)スピーカーの
開発製造を行うベンチャー企業を
16年前から手掛けております。
社名をFPS(フラット・パネル・
スピーカー)といいます。これは百
年ほど続いてきたコーンスピー
カーの世界に対して全く新しい概
念(技術)を持ち込んだものです。
コーンスピーカーの音は球面波
であるのに対し、FPSは平面波
といつて直進性の音波であり、音の
減衰率が低く、遠くまでクリア
に届きます。又もう一つの特徴とし
てほとんどハウリングをしない事
です。現在のところ世界でオンリー
ワン技術で、昨年には経済産業
省から「もの造り大賞特別賞」を
頂きました。又音質も改良を重ね
オーディオ対応のレベルまで発展
させてきております。

ディスプレイがブラウン管から
プラズマ・液晶の世界となり、厚さ
が数センチの世界となったにも拘
わらずスピーカーは依然として
コーンスピーカーが主流で、薄型
ディスプレイには小さなコーンス
ピーカーを複数並べて対応する
か、コーンスピーカーオーディオを
脇に置いて対応しておりますが、
FPSは1センチ程の厚さで、並
列に置けば壁一面をスピーカーに

することが出来ます。
現在なおJIS規格はコーンス
ピーカーを基準としていること
や、従来のコーンスピーカーを出
している大手企業(実際のところ、
特殊なものを除いてほとんどが東
南アジアで安く製造されており、
国内はほぼ全滅しております)の
抵抗に遭い苦勞しておりますが、
FPSの特長を必要とするところ
では採用されております。

衆議院本会議場・ホワイトハウ
ス・英セントポール寺院・中国人民
会堂・京都国際会議場・大学の大
教室や講堂・JRや私鉄のホーム・
東京新丸ビル・リニア鉄道館・水
族館・米ロッキード・マーチンが部
品としてなど。又、自動車用基準
は既にクリアしてあり、モー
ターショーで車載展示などもされ
ております。是非インターネット
上ホームページを見て頂ければ幸
いに存じます。

最後に機関紙「ひびき」の巻頭文
としては真に格調のない内容にな
りました事をお詫び申しあげます
と共に、岐阜県交響楽団の皆様
の益々のご活躍をお祈り申しあげま
す。

河合石灰工業株式会社
代表取締役社長

指揮者 今村能先生 「演奏会に寄せて」

今回指揮をしていただく今村先生に、先生が強く関わりを持つポーランドやその音楽について質問し、ご回答していただきました。先生ならではの、大変貴重で興味深いお話となりました。

ポーランドとの出会い

ベルリン留学時代に丁度ポーランドで第1回フイテルベルク指揮コンクールが開かれた。その第1回に私は参加できなかったが、どんな様子かを見学に行った。時を同じくしてアンジェイ・ワイダ監督の「指揮者」という映画がベルリン映画祭で上映された。この2つの出来事が、私をポーランドに引き寄せる事になった。

ポーランドのオーケストラがとてもまじめに音楽に取り組んでいる姿に、私はかつてのドイツを感じた。それもそのはず今のポーランドの半分位はドイツやオーストリアだったのだから。そこで次の指揮コンクールを受けようと思った。

その前にカラヤン・コンクール・ジャパンに入賞しベルリンに留学できる事になった私だが、先ずはドイツ語の勉強からスタート。ミュンヘンのドイツ語学校では、クラスメートで仲良くなった友達皆ポーランド人。ベルリンに留学したらコンサートマスターのミッシェル・シュヴァルベさんはワルシャワ音楽院の出身で、私も好きだったアッセルメのスイス・ロマン管弦楽団でもコンサートマスターをつとめた方だ。シュヴァ

ルベさんとはザルツブルクでの宿がいつも一緒だったので、とても親しくなり、色々話を聞いた。今ウィーン音楽大学で教えている元ベルリン・フィルのヴァイオリン、エドヴァルト・ジェンコフスキとも歳が近かったこともあり仲良くなった。彼もポーランド人だ。

ポーランド音楽との出会い〜ポーランド音楽の魅力

ポーランドの「フイテルベルク国際指揮者コンクール」は数ある指揮コンクールの中でも一段と難しいコンクールだと思ふ。

第1次予選は古典派の序曲3曲とシンフォニー3曲、2次はロマン派のシンフォニーや交響詩などを3曲、コンチエルトとアリアを3曲、本選は20世紀の現代曲を3曲、ポーランドの現代曲を3曲。合計18曲をいつでも出来るように準備しておくなければならない。その時に私も初めてポーランド音楽を指揮したのだが、実は以前の訪問で友人がで、LP20枚位を一举にもらっていたので、私は大いにポーランド音楽に親しんでいたし、スコアもかなり買込んでいたので、恐らく他の候補者よりポーランドに溶け込み易かったに違いない。

その「第2回フイテルベルク国際指揮者コンクール」では第1位優勝。次の年にはポーランド随一のスーパーオーケストラである、シンフォニア・ヴァルソヴィアとの演奏会を皮切りに、ワルシャワ・フィルをはじめ、ポーランドのほとんどのオーケストラ、

ワルシャワのポーランド国立歌劇場を指揮することになった。ポーランド内で私が今までに指揮したプロ・オーケストラの数は14団体、オペラは3団体(ワルシャワ・ウッチ・ヴロツワフ)。

ポーランド音楽の魅力を二言で言うなら「深みのある歌と、思わず踊り出したくなる踊り」だろう。ちなみにポーランドは踊りが大変好きな国で、ポルカ、マズルカ、ポロネーズの他、地方によって色々な踊りがある。何でもワルシャワのホテル・プリストルでの舞踏会に出るのが、ワルシャワっ子たちのステイタスらしい。踊るのが好きなのは何もウィーンだけではないのである。踊りは当然音楽がついているので、ポーランドの音楽のレヴェルは底辺の裾野が大変広く、音楽家たちはとても音楽的だ。

モニユシユコについて

1819年生まれのモニユシユコは1858年〜1872年(彼の死)まで、私も指揮しているポーランド国立歌劇場の指揮者として自作のオペラだけではなく、沢山のオペラのポーランド初演を行っている。彼はポーランド・オペラの父として、有名な二つのオペラ「ハルカ」「幽霊屋敷」を初め、16のオペラとオペレッタを作曲。ポーランドで一番重要な作曲家の一人である。家庭愛吟集はポーランドの家庭に深く浸透し、ポーランド文化の基礎となっている。ポーランドでのモニユシユコ存在はチェコのスメタナ、ドイツのウェーバー、イタリアのロッシーニやヴェルディに等しい。民族意識に目覚めた国民楽派と言える。

今回岐阜県交響楽団とは歌劇「いかだ乗り」序曲を演奏する事になり、とても嬉し

く思っている。歌劇「いかだ乗り」は一幕物で、「負しいいかだ乗り」のフラネクと「裕福ないかだ乗り」アントニの娘ゾシヤ」の恋物語。序曲はロマンチックで素敵な恋を思わせる序奏と、ポルカの音楽の上に乗った「いかだ乗り」の楽しさが聴いている人々を包み込む。急流を下るようなテンポの速い部分があり、何だか長良川をも思い浮かべてしまい、岐阜との強い繋がりを感ぜさせる。

シヨパンについて

確かにポーランドと言えばシヨパン。これは世界中同じ現象であり、特に日本に於いては著しい。ポーランドに行くことやたらとピアノが上手い人が多い。もし歌劇場で私がかへたなピアノ弾いていたら、その後仕事は無いは？と思われるほど、ポーランドではピアノ演奏のレヴェルが高い。私の同僚の指揮者達もピアノは達者だし、ピアノストたちもすごいレヴェルだ。それに輪をかけて素晴らしいのは日本からのピアノの留学生たち。ワルシャワに留学している日本のピアノストたちの平均的レヴェルは恐らく世界一ではないかと思われるほど、素晴らしいピアノストたちが集まっている。今回の演奏会に出演する粥川さんもその世界を通つて来た一人だ。そもそもシヨパンのピアノ協奏曲の難しさは半端じゃない。指が回る？回らない？のレヴェルでは無く、いかにその詩的なフレーズを素敵に表現していかかに焦点がある。しかもここまでポーランド的要素がぎっしり詰まった音楽を、果たして外国人である我々が本当に表現できるのか？というギリギリのところ、日本のピアノスト達は孤軍奮闘しているのだ。だから

ら今回の朔川さんとの共演を一番エキサイティングに待ち望んでいるのは、私自身。

シヨパン・ピアノ協奏曲第一番のオケ部分については、今回ポーランドで多く古くから使われている版を使用している。シヨパンがこの協奏曲をポーランド国立歌劇場で自らが独奏して初演した直後、シヨパンは国を後にした。三分割でポーランドが消滅したこともあり、その後一度もシヨパンは帰国しなかったわけで、シヨパンは記憶をたどってオケ・パート譜を作製した事が想像される。そうした中一番エレガントにまとめられているのがポーランドで古くから使われている版。3楽章に余計なトランペットの高音も無いのは嬉しい。ちなみに私がポーランドのこのトラディショナルな版を使うもう一つの理由は、この楽譜がとても見易く、美しく、演奏者が気持ち良く楽譜を読むことができる点にある。

シヨパンのピアノ協奏曲で大切なのは、「長い前奏や間奏でオーケストラが、シヨパンの歌回しをいかに素敵に演奏するか」にある。協奏曲は文字通りピアノリストだけのものではなく、オーケストラとの共同作業なのだ。ポーランドには独特の拍節感、歌い回し方、踊りのリズムがある。明らかにチェコとは違うし、ドイツとも全く違う。岐阜県交響楽団には「ウルシヤワ・フィルよりもポーランド的に！」と注文して仕込んであるので、こうご期待！

ドヴォジャークについて

「ドヴォジャーク」と記しましたが、誤記ではありません。自然なチェコ語の発音に近いのが「ドヴォジャーク」。

さて日本ではスラヴ系の音楽を全て同じ

系統の音楽としてくくってしまう事が多いが、それは大変誤解を伴う解釈。確かにドヴォジャークはスラヴ系ではあるが、チエコフスキーとは明らかに違うし、シヨパンやモニューシエコとも傾向が違う。良く言われるのは「ポーランドはイタリヤ、チエコはスイス」。ドヴォジャークはきちんとした中に色々な発展性を感じさせられる。こんなスラヴ・ジョークがある。チエコのネズミの話。

「チエコはあまりにも整頓されていて、食べ物調達するのも難しい！ポーランドは良いよな。あんなに自由があつて。よしポーランドに行こう！」さて、ねずみはポーランドに入ったのだが、「何て事だ、ポーランドはあまりに自由すぎて食べ物どこにあるかも分からない！チエコが懐かしいよ〜」そんな訳でドヴォジャークの音楽はとも輪郭がはつきりしていて誠実。そして温かみが付きまとう。大きなルバートは無いのに心を揺さぶられる長いフレーズがある。特にドヴォジャークの6番シンフォニーは素朴で美しく、構成感がしつかりしている。特に第1楽章は絶品。2楽章には息の長い美しい歌がある。テンポの揺れが最小限なので、3楽章にはヘミオラ（アクセントが移行）も現れフリアントを踊りまくる。第4楽章での爽やかな冒頭、どんなに盛り上がりつてもハモニーがある。どんな事があつてもこの曲を「力だねじ伏せる」様なやり方では料理したくない。むしろ色々な困難に対して「ピロド革命」の様に真摯に立ち向かつて行く演奏をしたい。

チエコではプラハとカルロヴィ・ヴァアリで私は指揮をした。カルロヴィ・ヴァアリはヨーロッパでは知らない人がいない位に有名な

温泉地で、ドヴォジャークも大好きで度々訪れた町、ベートーヴェンが不滅の恋人とデートしたり、シヨパンが訪れたり話題が尽きない。カルロヴィ・ヴァアリのオーケストラはドヴォジャークの「新世界交響曲」をヨーロッパ初演したオケでヴァツラフ・ノイマンも常任指揮者をしてきた事がある。チエコのオケを指揮すると、その健康的な明るい音色、音楽作りのきちんとした構成感、無駄な力を排した爽やかさを感じる。どうも日本ではチエコの印象も歪んで伝わっている様だ。



エピソード

23歳でベルリン・フィルを振った。カラヤン先生から「日本のムーティ」と呼ばれた。その頃の私は無鉄砲、髪型までムーティにそっくり。というか自分では「ムーティは私にそっくり」と思っていた。

ある時ベルリン・フィルのチェリストから「明日は空いている？」と尋ねられ「勿論！」と答えたら、「指揮してもらえないか？」という事で「ベルリン・フィルの12人のチェリスト達」の練習やレコーディングを指揮する事になった。今でもそのレコーディングは残っているはず。

ミラノ・スカラ座での話。スカラ座オケのトランペッター奏者が本番の寸前まで「マエストロ、この所た〜りらりらり、ら〜りらりらりら」マエストロ、・・・と何度も何度も嘆願に来た。「展覧会の絵」の話。

ウィーン・フィルの管楽アンサンブルの人たちとモーツァルトのシンフォニア・コンチエルタンテを共演。何とどんな事があつても私の指揮に合わせ忠実にアンサンブルしてくれた！

ウィーン・ムジックフェスティバル大ホールでベートーヴェンの命日に第9を指揮。ウィーン交響楽団の人たちも必死になつて私の指揮に答えてくれた。第9はウィーンの人でも難しい。

ワルシヤワのシヨパン音楽院の学生オケを指揮した時、ルトスワフスキの交響曲第4番。ポーランドの若者達にポーランド音楽を教えている不思議な自分を発見！

岐阜県交響楽団の印象とメッセージ

専用の練習所まであります！選曲がマニアック！皆演奏に必死！託児所付き！吸収力がすごい！忘れるのも上手いらしい！何はともあれ、練習後にはあれよあれよという間に上手くなつていくのは嬉しい。「文化」と言うのは人間にとつて一番大切なものです。その文化の国際交流に貢献してきた皆様に敬意を表します。これは私がポーランド文化功労章を頂いた時に、ポーランドの文化大臣から頂いた言葉です。その国の文化を知るにはかなりの努力が要ります。でもそれを演奏家が成し遂げた時、それを聴いていた方々が感動する。そして演奏家自身も充実感を味わえる。

ピアノニスト 粥川愛さん インタビュー

今回シヨパンのピアノ協奏曲で競演していただく粥川愛さん。粥川さんはシヨパンの故郷であるポーランドへ留学してみえたこともあり、シヨパンとポーランドについての大変興味深いお話をお伺いすることが出来ました。

ポーランドに留学していらつやつた粥川さん、現地ではシヨパンをどう感じられましたか？

シヨパンは、やはりピアノニストにとって特別な作曲家です。小品、例えばプレリユードや、バラード、スケルツォ、マズルカ等を沢山残した作曲家ですが、その中で全てを表現する作曲家であり、しかもそれをピアノに特化しています。音楽の完成度も凄く高い。ポーランド人は本当にシヨパンを誇りに思っていました。

エヴァ先生のいらつしやるポーランドへ留学することになって、先生の演奏はじめ、音楽祭などで日本にいる時とは比較にならないほどのシヨパンの演奏を聴きました。音楽表現の幅の広さにはとても驚きました。楽譜からこんなに表情豊かな音楽が汲み取れるって凄いと日本では経験しなかった衝撃にもたくさん出会えました。

また、それは言語の違いによることからくることにも気付きました。抑揚やアクセントがフレーズを創るイメージにも関係していたり。私たちは音楽を綺麗にまとめようとしがちですが、彼らは決してそうではないんです。音楽は、最後の最後の和音では美しくなりますが、それまでは様々な人間の感情や劇的なドラマが含まれていることが多いんです。

シヨパンの故郷・ポーランドにてエヴァ先生に師事された粥川さん、その時の様子や先生から学ばれたこと等をお聞かせ下さい。

よく言われたのが「インテンポで弾かない」ということです。ポーランドの民族舞踏マズルカやワルツ(ウィーン風ではない)などの舞曲を弾く時なんかにはやはり「そのリズム、そのまま弾かないで」とよく言われました。もちろん基本のテンポやリズムはあります。日本にいた時に正しい拍感で弾くことの大切さを学んできたものにとつては、先生の要求はとても難しいことでした。また「楽譜どおり弾かないで」とも言われたのですが、これが一番難しい(笑)これは言い換えれば「うまく時間を使いなさい」ということなのですが、

どうやって時間を使うか、というのが最初は本当にわからなかったのです。ただ先生の演奏を聴くと、基本的なテンポはあるのですが、そこを変化させる部分が必要。小節線が無いくらい自由に弾く部分もあったり。先生もそこは言葉で全く説明してくれるタイプの先生ではなかったのです。とにかく聴いて学ぶしかなかったです。でも、レッスンを重ねていくうちに、仰つてることがだんだんわかるようになってきました。それは、音楽というのは時間芸術で、その時間をどう操るか、ということに繋がってくるんです。例えばシヨパンの場合、裝飾音について言えば、シヨパンは小節に入りきらないくらいにたくさん裝飾音をワーツと書いています。裝飾音があつても小節内の拍子はもちろんありますから、時間の伸び縮みをいかに作るかなんです。旋律の歌い方も、実際歌うとわかりますが、自然な歌には呼吸や音程間の緊張が必ず在ります。どの作曲家にも時間芸術という視点はあてはまりませんが、特にシヨパンにはそれが大切であることを先生からは学びました。もちろん先生は言葉では説明してくれませんが、それが(笑)

ポーランドでの思い出を何かお聞かせ下さい。

いっぱいあり過ぎます(笑)特別だと思うことに、私はポーランドでは恩師エヴァ先生のご自宅に住み込みで留学生活を送らせていただいていたいました。先生が2

階、私が1階、3階がレッスン室だったんですが、やはりご自宅なのでポーランド人の日常を直接感じながら暮らすことが出来たことですね。家族全員が住んでみえるので、ポーランドの方と常に接することが出来ましたし、練習していても常に誰かが聴いている環境でした。だから練習ではなく、常に聴いてもらう音楽として弾くことが出来ました。先生のご自宅には、いろんなゲストがピアノを弾きに来ていました。誰かが練習してるなと思つたらそれがダンタイソンだった、なんてこともありましたよ。

粥川さんにとってのシヨパンのピアノ協奏曲とは、どんな曲ですか？

私がこの曲を人前で始めて弾いたのは、ポーランドへの留学する直前。この曲を弦楽四重奏版に編曲されたもので芸大の間と演奏しました。その演奏会でポーランドへ送り出してもらったという嬉しい思い出があります。

もう一つ、私がポーランドへ留学中、夏に「Chopin: i Jago europe シヨパンと彼のヨーロッパ」という音楽祭があつたのですが、たまたまその音楽祭のディレクターが私の師であつたエヴァ先生(エヴァ・ポプウツカ先生)の旦那さんだった関係もあり毎日音楽祭を聴かせてもらいました。音楽祭ではやはり必ずシヨパンが演奏されていましたが、音楽祭の最後には必ずシヨパンのピアノ協奏曲(第一番が多かったです)、が演奏されることが決まってい

ました。開催されている季節は8月の夏ですが、8月末になると夜は本当に肌寒く感じるくらい涼しくなるんです。ポーランドの少し早い秋を感じる瞬間でした。様々な演奏家たちによる、様々なピアノ協奏曲第1番を聴けたことはとても素晴らしい体験でした。

留学出発の時に弾いたショパン、そしてポーランド留学でのショパン、それから時を経てこうして今回故郷の岐阜でこの曲を演奏できることに、ご縁を感じています。岐阜県交響楽団さんに感謝です。

ピアノソノの曲が多いショパンですが、今回演奏していただくのはピアノ協奏曲です。敢えてピアノ協奏曲を書いたショパンですが、演奏される際にこの違いを意識されますか？

ショパンがピアノ協奏曲を書いたのは若い頃のみでした。その後にはショパンに必要だったのは、バラードやマズルカなど、最初にお話したように小品が多かったのです。性格的小品という枠は、非常にロマン派的です。ショパンは自身のピアノ演奏の時でも、リストのように人前で華やかにパフォーマンスをすることや大ホールでの演奏よりも、親しい人達に囲まれたサロンなどでの演奏を好みました。そういう意味でも、大ホールでの華やかさがあるピアノ協奏曲は、ショパンが若いころの希望に満ち溢れ、意気揚々とした気持ち、それを弾きたいという気持ち、精神が備わっていたところにこそ完成した作品だと感じて

います。

ショパンの作品全体をみた時に、ポーランドという国土を強く感じさせる面がある一方で、ショパン自身の個的な一面を感じることも可能です。ピアノ協奏曲第1番に関しては粥川さんほどのように感じられますか？

ピアノ協奏曲第1番に関して言えば、この曲はともポーランド色を強く感じています。ショパンがこの曲を書いた時期というのが、まさにこれからポーランドからウィーンやパリへ出て羽ばたこうとした時期。この曲はショパンがワルシャワで自ら演奏した最後の曲にもなっています。ポーランドに生まれポーランドで育った青年ショパンが、これからの未来への希望と野心に溢れた気持ちで書いた意欲作です。第2楽章はとりわけ青春の柔らかな心を感じますね。

ショパンの曲全般を演奏する際に何か意識しておられることはありますか？

ショパンの生きていた時代には現代のモダンのピアノはありませんでした。最近の演奏会では、モーツァルトやハイドゥン(古典)辺りまでは当時のピアノ、フォルテピアノで演奏されることが増えています。しかし、それ以降の作曲家の作品になると何故か一律モダンピアノで演奏されることが多いんです。もちろんフォルテピアノからモダンピアノまでの過程には、実に

様々なピアノがありました。ショパンはプレイエルやエーラーというピアノを使っていました。

私も大学時代からフォルテピアノを習いましたが、古典とモダンの間に位置するピアノを触る機会もありました。やはり鍵盤のタッチやペダル、音の伸びが全然違うんです。それで「やっぱりこういう楽器で演奏していたことを音の引き出しに入れてからモダンで演奏しないといけないのではないか」という考えになりました。演奏のアイデアがより生まれるきっかけになるのです。ワルシャワでも、ショパンの生きていた時代に作られたフォルテピアノを使った演奏会はたくさん催されていました。

ショパンのピアノ協奏曲第1番でここが好き！という瞬間はありますか？

惹かれる部分はたくさんありますが、例えば第1楽章最初に歌が始まるころ、第1主題。単旋律で歌われる右手の歌が凄く印象的です。そこをどう弾こうかということはいつも思います。あと、再現部の第2主題の優しいト長調からのアダージョのコーダーその前から第2主題がト長調で始まりますが、ト長調からホ単調へ向かうまでの、だんだんアグレッシブになっていくピアノからコーダーの流れが音楽的に素晴らしいです。技術的にも難しいですが、何度弾いても心が震えます。agitato(激動した)と書かれていても、ピアノ(弱く)と指示がある所に、意味が

込められていると思います。好きな部分やこだわりは話したすときりがありません。

今村先生とは今回が初めてのご共演ということですね。

今回初めてお会いしたのですが、先生は日本人としてポーランド音楽にも造詣が深いので、ショパンと一緒に演奏することに、安心感があります。今村先生はエヴァ先生やその旦那さんのこともよくご存知でしたし、ポーランドや日本での共通の知人が多くいたので、初めての方とは思えないくらいたくさんのお話が出来ました。今回は岐阜県交響楽団さんが今村先生と引き合わせてくれたという意味でもとても感謝しています。

岐阜県交響楽団の印象はいかがでしたか？

これまでの打ち合わせに様々な方とやりとりをしています。凄く丁寧で、気持ちよく準備ができましたし、大切に考えていただけてると感じました。団員の皆様はお仕事をしながらの練習だと思いますが、「音楽しよう！」という気持ちが凄く伝わって、それが凄く嬉しかったですね。本番が楽しみになるように、それまで良い時間を重ねていきたいと思います。

本日は練習後のお疲れのところ、長時間に渡りありがとうございました！

特集 オークストラを支える楽団員たち 第1回

岐阜県交響楽団には、通常の楽器の練習に加えて、人の目に付かないところで演奏会に向けた重要な仕事をしている方がいます。こうした方々の努力なくして演奏会は成り立ちません。そんな方々を僅かですが、ご紹介いたします。

オーケストラの「ライブリアン」

チエロ 洞田 美加子

私は、岐阜県交響団のライブリアン（楽譜係）を務めています。

ライブリアンは、全ての演奏者の楽譜を準備することから始まります。演奏者が見ている楽譜ってどんなものかご存知ですか？指揮者は全ての楽器の音を書いてある楽譜を見ている。では、各演奏者は？というと、自分が演奏する音だけが書いてある「パート譜」を見て演奏します。弦楽器の人は、二人で一つの楽譜を見て演奏しますが、家でも練習ができるように、全員に楽譜を配布します。管・打楽器の人は、同じ楽器でもそれぞれパートが違うので、一人ずつ楽譜を見ている。つまり、舞台上に乗っている人数×曲の数、それだけの楽譜を準備します。

演奏会の曲が決定し、その曲が蔵書になる時は、購入、または、レンタル、あるいは、スコアから写譜をして作り、人数分コピー・製本し、配布します。そして演奏会の次の土曜日には、もうその次の演奏会の練習が始まります。曲決めや楽譜の到着が遅れると、最初の練習に間に合わせるのが大変です。急いで作ると、ページが飛んだり、逆になったり；いつも練習初日は、ハラハラしています。



本番当日は、不測の事態に備え、舞台袖に予備の楽譜を準備します。

もう一つは、創立六十周年を越えた岐響には、財産とも言える膨大な楽譜があります。その管理です。楽譜の片隅には、書き残された笑える言葉、苦勞の跡などを、垣間見ることが出来ます。故小松先生が指揮

をされた楽譜は、書き込みで真っ黒です。ライブリアンは、責任重大で大変なことも多くありますが、楽譜を通じていろいろな想いが伝わってきて、いろいろな出会いや感動もあり、とてもやりがいのある楽しい仕事です。

当日係りの仕事

ヴァイオリン 浅野順一

私の拝命している仕事は、当日係りと名付けられています。名前の通りですと、演奏会の当日にする仕事つばいのですが、現実には「演奏会当日をうまいこと回すための下準備と当日のイレギュラー処理係」が一番近いです。引き受けた当初は、何をやるのか謎の多い担当でしたが、現在では担当の区分けがきちんとできてきて、謎は少なくなりました。

メインの仕事は、舞台配置の決定と作成、当日のタイムスケジュール表の作成です。それを基に会館の担当の人と打ち合わせを行います。これらがしっかりと行ければ、当日私が居なくてもつつがなく演奏会は進行します。俗に言う「段取り8分」がメインの仕事です。それだけに経験がモノを言う部分があるうえ、実は舞台という物自体が結構独自の世界なのです。舞台上では寸法は、尺貫法になります。一尺は約30cmというアレです。なぜかはよく知りませんが、そういうものらしいです。尺貫法抜きに語れないのが、オーケストラの後列、管

楽器の人たちの乗っている板。これはひな壇と呼ばれますが、この大きさをコンロクなどと呼びます。正確には「4尺×6尺の板」です。これを一人あたり90cm四方の空間が必要だとして…と計算して、枚数を算出します。メートル法と尺貫法が入り混じる会話を、会館の舞台担当の人とお話をするのは、かなり慣れが必要でした。マーラーの復活のように舞台上を人で埋め尽くすような場合は、約30cmで計算をして冷や汗をかきました。正確には1尺は30.3cm。たかが3mmですが、48尺(8間)のひな壇を繋げると誤差が14cmも出ます。反響版との隙間を20cmに設定したのに、10cmも空きませんでした。15mの大空間で15cmに冷や汗をかいたまらないうね。

これほどやりがいのある係りなのですが、なぜか人気が無く、分業制になって以来、三期連続通算6年やっています。図面が描けて平日動いて苦情処理の上手い人、引継ぎ文書はしっかりとできていますので、立候補をお待ちしています(笑)。



アマオケ・フェスティバル甲府大会

今年、第42回となるアマチュアオーケストラ・フェスティバルが、山梨県甲府市にて開催されました。岐響からも3名が参加しました。その1人、Vnの大澤さんに演奏会の様子を話していただきました。

アマオケ・フェスティバル甲府大会に参加して

ヴァイオリン 大澤和芳

今回、10年ぶり3回目の参加となるアマオケ・フェスティバルのため甲府市へやって来ました。

曲目は、リヒャルト・シュトラウスの交響詩『英雄の生涯』！

実は私の一番好きな曲でありながら、アマオケにとっては難易度が高くこれまで演奏する機会がありませんでしたが、今回は挑戦の意味もこめて参加を申し込めました。

さて、今回のようなフェスティバルも、曲の難易度が高く練習期間が短いという条件下では指揮者とコンマスの果たす役割は非常に大きいものがあります。(もちろん我々自身の努力も必要ですが)

指揮者は中田延亮(のぶあき)さん(私と同じ年の39歳)。医学部在学中に音大でコントラバスと指揮を専攻するという素晴らしい経歴の持ち主。的確な棒さばきという感じでオケをしつかりコントロールしていきます。なにせ150名からなる巨大なオーケストラ：自身が1stヴァイオリンの最後列(なんと10プル

ト)にいたので分かりませんが距離感が相当あります。「しつかり振つてくれる」こととができたと思います。

また、曲中に幾度となく現れるヴァイオリン独奏を受け持つのは、31歳の若きコンサートマスター、ベンジャミン・ツイアフォーゲルさんです。

色彩と情感豊かに奏でる独奏を3日間、間近で聴くことができたのはまさに参加者の特権と言えます。加えて的確にザツツ(音の出だしの合図)を出すことで奏者達をまとめていく後姿は非常に頼もしい存在でした。

初合奏でこのお二人に率いられて何とか曲を通す(途中止まらずに演奏すること)ができたとき、これから演奏を仕上げていくことで良い演奏会になりそうだと感じました。

そしてオケフェスという、演奏以外にも楽しみがあります。それは全国から集まる参加者たちとの交流です。(早い話が夜の飲み会！)

今回岐響からの参加は私とコントラバスの2名だけでしたので周りは初対面の方ばかり。過去2回の大会は岐響からの参加者が多かったのですが、むしろ、今回のようにひとりの方が新たな人脈を広げられることができて非常に楽しかったです。

初日の練習とパート別懇親会、2日目の練習と全体レセプションと、練習と盃を重ねることに一丸となった我々はいよいよ本番を迎えます。

最後の全体練習を終えたあと、コンマスのツイアフォーゲルさんが1st Vnだけを集めて少しお話をされました。「fffは音量だけでなく表情で表すこと。pppはぐつと落として。私をよく見てついてきてほしい。皆さんの音楽への愛情に敬意を表している。」といったような内容でした。

正直、言われている内容は特別目新しいことではないのですが、本番に臨む気持ちが高まったというか結束力が増したというか、皆がそう感じたことだと思います。

そして本番開始。冒頭の低弦とホルンによる英雄のテーマ：ツイアフォーゲルさんの美しい独奏…中盤、英雄と敵との激しい戦闘シーンが最高潮に達したと

き、再び冒頭の英雄のテーマがかえってきて高らかに勝利を歌い上げます。このとき、「難しい曲だけどやっぱり参加してよかったー」という思いが溢れました。

最後、年若い英雄が伴侶に看取られながらその生涯を全うする場面、私の脳裏ではこの3日間が走馬灯のように流れ、まるで映画のように「THE END」の文字が眼前に浮かんできました。(本当です)

万雷の拍手のなか、ふと舞台の反対側を見やると、コントラバスの須原さんが顔をくしゃくしゃにしているではありませんか。

私よりずっと参加回数が多い須原さんがこんなにも感動しているなんて、よっぽど楽しかったんだなあと思うと、私自身の感動も2割増しとなりました！



▲大澤さんとツイアフォーゲルさん

今年の演奏活動より

岐阜県実演芸術アウトリーチ事業 川辺北小学校公演（7月6日）

この事業は、岐阜県内の実演芸術文化団体が、県内の学校教育機関や文化施設、福祉施設へ出前公演するもので、岐阜県交響楽団は今回、川辺北小学校でのアウトリーチ公演を行いました。

本格的なオーケストラ曲の他に、オーケストラが児童さんたちの合唱の伴奏をしたり、楽器紹介や指揮者コーナーなどを行って、生のオーケストラの素晴らしさを楽しんでいただきました。

以下は、川辺北小学校の児童さんたちに書いていただいた感想文からの抜粋です。初めて生のオーケストラを聴いた驚き、間近で楽器を見たときの発見、そして音楽の楽しさ、本当に児童さんたちにこの公演を楽しんでいただけたことが伝わる、素敵な感想文をたくさんいただきました。

- ・がっきをさわらせてくれてありがとう。
- ・いっしょに歌う事がたのしかったです。みなさんのえんそうに負けないうくらい大きききれいな声で歌いました。
- ・しきぼうはすごくさきのほうはとんがっていました。
- ・古どけいの音楽がかなしくなったり楽しくなったりしたことがおもしろかったです。
- ・・・・もっとおどろいたのは、バイオリンとハーブです。でもハーブかハーブかわかりません。
- ・きいているとかってに体がうごいてリズムにのってしまいました。
- ・音楽で習った楽器がたくさんあったけど、コントラバスは私の想像以上にでかくてびっくりしました。
- ・北小のききなれた校歌が新しく生まれ変わってかっこよくなっていておどろきました。



次回のアウトリーチ事業は、岐阜市立中央中学校の生徒さんを対象に、12月23日（日）岐阜市民会館にて開催予定です。